

三崎漁業 協同組合



「伊方町で漁師になりたい」という方のために、移住希望者を対象としたセミナーを開催。実際に移住してきた方のためには、漁の指導をしてくれるベテラン漁師を紹介。その方のもとでしっかりと技術を取得して1、2年後の一本立ちを目指します。「現在、20代と40代の2名の移住者が独立型の漁師の修業中。伊方町では雇用型の漁師も受け入れており、それぞれの希望するスタイルで働くことができます。未経験者も安心して挑戦できます。」

新規就漁を 支える制度

町の主要産業である漁業ですが、就業者は減少傾向にあるのが現実です。そこで減少する担い手の確保に向けて、新規漁業就業者の総合支援を実施。漁業への就業・定着促進を図るために、独立自営を目指す研修生の指導者（主に個人）に給付金を支給。研修経費として月額最大28.2万円を最長3年間給付します。



陸では柔和な表情の堀田さんですが、仕事の時にはキリリと引き締まった表情に。伊方の海は彼のホームグラウンドです。取材中には伊方の海士（あまし・素潜り漁師）さんからナマコの差し入れ。獲れたてを日々味わえるのも魅力。

漁師の家に生まれ、子どもの時から家業を手伝い、いつかは自分も漁師になろうと考えていた堀田さん。「でも兄が後継をしていたので、じゃあ別の仕事に就こうか」と横浜の青果市場に就職しました。陸で暮らすうちに海が恋しくなり、2年後にUターン。当初は父と一緒に船に乗っていましたが、35歳で独立しました。一本釣り漁師の堀田さんは、たった一人で夜明けとともに出海し、帰港は夕方。時期によっては夜通し漁をすることもあるそう。「しんどいよ。夏は暑いし、冬は寒いなあ。思うように成果がでない日も少なからずあるよ」。そう言いながらも、腕一本で家族を養ってきた堀田さんの表情は、とても自信に満ちています。

「釣れたら嬉しいし、釣れなかったら悔しい。ただ今日はダメでも、明日はいいかもしれない。そう思って毎日海に出る」。その潔さこそが、漁業の面白さなのかもしれない。

05
灯台じもと
暮らしの人々
漁師
堀田春樹さん
(47歳)



幼い頃から見つめてきたじもとの海が職場。
明日はいいかもしれない。
そう思って毎日海へ